カナダの大学教育

アルバータ大学理学部化学科教授
藤永　茂

はじめに

外国生活を経験した日本人がその国の事情を正しく伝えるのは、一般に考えられているよりも困難なことだと思う。テレビ、新聞、書物を含めて、個人の見聞、個人の体験というものは何といっても限られたものだからだ。その上、異郷での経験は強烈にその人の感性の中核にひびくものであり、それに基いて主観的な偏った判断が下され、それが一般的な真実として伝えられ勝ちである。

一九六八年の春、私は妻と二人の息子をつれてカナダに移住し、アルバータ州エドモントン市にある州立アルバータ大学化学科の教授の職についた。二人の息子は今は同大学の学生で、長男は数学と音楽のふたまたがけで勉強をつづけ、次男の方は生化学へ進むつもりのようである。そこで、学生の立場、教師の立場の両方から、カナダの大学教育の一斑をとらえてみようと思う。私たちの直接の経験は限られたものでしかないが、アルバータ大学がカナダの大学として平均的な大学の一つであることは、十分注意してたしかめたつもりである。

入学試験

大学入試は日本と同じ意味では存在しない。もちろん、ある学部の入学志望者の数が収容人員を上まわる場合には、選抜が行なわれる。医学博士として身をたてようと志す学生は、医学部学生としての四年の本格的コースに入るまえに、少なくとも二年間は適当な講義に出席して単位を修得しなければならない。アルバータ大学では、成績は九点満点で採点されるが、この二年間の準備期間に取るコースの平均点が六点以上なければならないことになっている。しかし、これは必要下限であって、実際にはその平均点が八点あたりでなければ医者になる望みは捨てなければならない。そのため、志望の学生たちは真剣に勉強する。時折、それが行き過ぎて、「自分は医学部志望だから、こんな点をつけてもらっては困る。もっと良い点に直してくれ」と、しつこく迫る学生が出てきて、手をやくこともある。しかし、医学、法学関係をのぞく学部では、正常な成績で高校を卒業すれば、大体希望する学科に入学することができる。

学部学生寄宿舎（中央の平たい建物に学生食堂がある。）

入学してから

学士号を目的とする場合は大体四年が必要在学年数で、一年は、九月から十二月の第一学期、一月から四月の第二学期の八ヵ月の勉学期間と、四ヵ月の夏休みからできている。夏の間は、何か職業について、大学生活を続けるための費用を稼ぐ学生が多い。

講義についての試験は、各学期の中ほどと終りにあり、二つの学期にわたる全年コースでは、第四回目が最終試験として最も重要なものである。講義の全期間にわたって宿題もよく出るので、良い成績をとるためには常に緊張して勉強を続けなければならない。この点、カナダの大学はアメリカの大学と同じで、イギリスの大学の場合のように、卒業まえに集約的に重要な試験はない。トロント大学の構成は一見イギリス風にも見えるが、実質的にはアルバータ大学と余り変わらないようである。

日本では入試の難関を突破した学生は大学では勉強しなく